

- I. 日時：平成 21 年 8 月 25 日(火) 午後 2 時から午後 4 時 30 分まで
- II. 場所：私立大学情報教育協会事務局会議室
- III. 出席者：山本涼一委員長、田中宏明副委員長、五十嵐義行委員、小林悦雄委員、  
原田康也委員、小野隆啓委員、西納春雄委員、山本英一委員  
井端事務局長、森下、恩田
- IV. 検討事項

- ・学部共通英語学士力の詳細設計について
- 1. 共通の到達目標をイメージしたコアカリキュラム
- 2. 到達目標
- 3. 測定手段の検討
- ・資料：1. 委員会次第
- 2. 委員会出席表
- 3. 「学士力」を達成するためのコアカリキュラムのイメージ（資料①）
- 4. 分野別の教育課程編成上の参照基準について  
分野別委員会の活動について（参考①）
- 5. 分野別の質保障の枠組みに関する概念図（参考②）
- 6. 大学教育の分野別保障の在り方検討委員会（参考③）
- 7. 分野の単位の設定についての基本的な考え方（参考④）
- 8. 分野別の教育課程編成上の参照基準について（参考⑤）
- 9. 分野共通英語の詳細な学士力案（各委員作成）（資料②～⑨）
- 10. CEFR 共通参照レベル：全体的な尺度（資料⑩）
- 11. 分野共通英語の学士力最終（案）（資料⑪）

#### 議事メモ

- 1. 分野共通英語の学士力最終（案）（資料⑪）について  
委員長より分野共通英語学士力についての最終まとめの提案説明がなされ、その資料に基づき議論が行われた。その結果、分野共通英語の学士力最終（案）の骨子は総論としておおむね了解できるので、細部の字句の修正等は評価・測定方法の議論と並行して行うこととなり、測定方法等の議論に入った。
  - ・測定方法に関する議論において、次のような問題点が指摘された。
  - ①「3. 学習する態度と志向」の項目に関しては、「国際社会との関係を深め…」の部分はあまりに広範囲に渡る記述であるので、社会文化能力あるいは言語コミュニケーション能力あたりの表現に絞るべきである。
  - ②「4. 専門分野における運用」に関しては専門分野への継続あたりにとどめ、アカデミック語彙の習得等の表現に納めるべきである。
- 2. 学士力の到達目標の評価と測定  
委員長より、測定の方向性について各委員および事務局に対して意見が求められた。
  - ・入試の多様化に伴い、中高レベルの到達力を計測する必要がある。各大学で統合力を測るのは困難であるので、業者テストの利用も視野に入れるべきである。
  - ・多様な学生が入学してくるので一律的な基準では不可能であろう。fluency と acquisition の  
両面で測定する必要がある。だが、学士力という一律の基準を示す一方で、多様な基準で測るというのも矛盾がある。CEFR などの差分での目安の設定が望ましい。
  - ・日本語を用いてできる能力を英語でどこまでできるかを測るという方法も一考である。業者テストを活用する方法は問題ないが、検定が英語学士力の目的にならないようにすることが大切である。

- ・現行の大学カリキュラムや授業時間でやれることはきわめて限られているので、現実と理想の狭間で悩んでいる。業者テストにおいても発音や speaking 能力を測定することはできない。
- ・生涯学習の一環として大学在学中の成果を測るべきである。また尺度は、たとえば3段階くらいを設けて、そこに適合させていく方法もある。アドミッションとディプロマ時点の2回での測定が必要である。
- ・業者テスト等による客観的測定は一要素として考え、間接的評価として、結果に至るまでのプロセスをみるべきである。学習ポートフォリオとして、個人の学習履歴なども評価の対象とすべきである。
- ・業者テストや can-do リストを用いて、評価者も学習者も到達レベルを確認できる方法を採用すべきである。graded texts 等を用いることによって、教材の共有は可能であろう。
- ・業者テスト、担当者、学習者で評価すべきである。将来 GPA 制度が確立されれば、学士力の判断基準となる可能性もある。複数チャンネルで評価すべきである。英語学習を教室で完結させるのではなく、社会言語教育として捉えることが大切である。
- ・コアカリキュラムという視点よりも、個々の項目での測定を行うという方向で検討すべきである。
- ・測定内容や測定方法は明示する必要がある。
- ・到達の具体的基準が未だ明示されていないので、たとえば3段階で、到達度の明示する必要がある。
- ・分野共通英語の学士力最終案の3と4に関しては、測定が不可能なのではないか。言語コミュニケーションという視点で3を書き直すべきである。

#### まとめ

- ・業者テスト等による客観的な測定方法も必要であるが、高得点を得ることを学習の目的とすべきでない。
- ・入学時と卒業時の2回、あるいは中間時点を含めた3回の測定が必要である。
- ・大学が一方的に評価するのではなく、学生も測れるように、can-do リストなどを用いた学習やポートフォリオなどの手法も必要である。
- ・態度や志向を測る方法として、College Learning Assessment などが参考となる。カリキュラム、ワークシート、評価シート、自己評価と総合評価など多様な評価が必要である。
- ・学士力の4項目に関して評価するにあたり、成長をポジティブに測ることが大切であり、学生の勉学意欲を高めるという視点を重視すべきである。

#### 解決方法

- ・CEFR の基準のような尺度 (criterion) を設けることができれば、個々のレベルに関して  
は担当者も学習者も、ICT の活用などでも測定が可能となる。また、その尺度に合わせて、コアカリキュラムを作成することも可能となる。

#### 今後のスケジュール

- ・委員長が上記の学士力の議論の内容をまとめた文案（学士力の修正案）を8月末までに作成する。
- ・評価案（委員長作成）とコアカリキュラム案（副委員長作成）は9月1日に各委員にネットで配信し、その後、ML上で議論を行い、9月中旬を目処に取り纏めを行う。
- ・次回10月24日は委員会として3件（学士力・評価測定・コアカリキュラム）の最終案を纏める。

評価案作成チーム：山本委員長、小林委員、西納委員、山本英一委員  
コアカリキュラム作成チーム：田中副委員長 五十嵐委員、原田委員、小野委員